

出題傾向

大問三題で、大問①は1500字程度、大問②は2000字程度の「随筆文の読解問題」、大問③が「語彙問題」という構成である。それぞれ8～10問程度の小問があり、すべて4肢択一式の選択問題である。問題文が比較的短く読みやすいものであることや、設問が基本的なものであることから、全体的には「やや易しい」レベルである。基本的な国語力がきちんと身につけているかどうかを測ることに主眼をおいた出題傾向である。大問ごとの特徴は以下の通り。

大問①は、山崎正和『混沌からの表現』からの問題文であり、「花火」という具体例をきっかけとして「日本文化の根源にある序破急のリズム」について考察していく文章である。難解な用語が少なく、論理も明快なので受験生にとっても読みやすいはずだ。「日本文化」というテーマは、28年度に大問②で出題された水村美苗の文章と共通である。「漢字の熟語を完成させる」「適切な接続語を入れる」などの空欄補充、傍線部の「理由説明」「内容説明」といった読解問題が中心であり、選択肢は語句や短文であるのが特徴である。「特殊な漢字の読み」「外来語（カタカナ語）の意味を問う」「伝統芸能に関する文学史的知識を問う」「表現技法を問う」などの知識問題も出題されている。

大問②は、野矢茂樹『哲学な日々』からの問題文であり、「書くこと・話すことは『読者・聞き手の問い』を前提とする」という内容である。「話し言葉」に近い文章で書かれており、大問①に比べてさらに「随筆」的な文章だ。「コミュニケーション」というテーマは、28年度大問③で出題された吉田尚記の文章と共通である。「慣用句」「文章」の空欄補充、傍線部の「理由説明」「内容説明」、本文全体での「要旨把握」「文章に表題をつける問題」など読解問題が中心となっている。「表現に関する問題」「漢字の書き取り問題」などの知識問題も出題されている。

大問③は、「漢字の正しい読み」「漢字熟語の正しい用法」「敬語の正しい使い方」「対義語の関係」を問う語彙問題から成る。ほとんどの設問が「適切でない」ものを選ぶ形式であることが特徴として挙げられる。28年度は「論理に即して文を並べ替える問題」「外来語の意味・用法」なども出題されていた。

学習アドバイス

第一に「知識問題」対策である。大問③だけでなく、大問②や大問①の中でも「語彙力を問う問題」「国語常識を問う問題」がある。

- ①「漢字と重要語句に関する問題集」を1冊くりかえし学習しよう。語彙力がついてくれば、「文章の読解力」もUPするので一石二鳥だ。「漢字の読み書き」だけでなく「同義語・対義語」「慣用句・ことわざ・四字熟語」「カタカナ語（外来語）」の知識も重要である（大問③で語彙問題として問われている）。
- ②「敬語」「表現技法」「文学史」などの「国語常識」についても問われているので、国語便覧や問題集を使って正しい用法を理解しておくこと。

第二に「読解問題」対策としては、「評論・随筆問題」が中心となった問題集を使おう。難易度は基本レベルが良い。

- ①「課題文の段落ごとの要点箇所に印をつける」→「課題文全体を150字前後に要約する」という訓練で「読解力」をUPさせることができる。指導者に添削してもらうこと。
- ②「解答力」UPのためには、「傍線部や空欄の前後の文脈で『言い換え関係』『対比関係』『因果関係』などの論理を見つける」→「課題文中に見つけた『論理』に合致する選択肢を選ぶ」というパターンに慣れること。そういった「基本的論理」の読解力を試すというところに出題意図があると考えられるからだ。

第三に「時間配分の練習」も必要だ。過去問を使って、「どういう順序で解くか」「どういう時間配分で解くか」「見直しにどれぐらいの時間を想定しておくか」など、シミュレーションしておこう。